



Mercury Symphony Orchestra  
The 30th Regular Concert

Sun. 25. Aug, 2002  
Tokyo Opera City  
Takemitsu Memorial

水星交響楽団第30回記念定期演奏会  
特別記念プログラム

2002年8月25日(日)  
東京オペラシティ大ホール  
タケミツメモリアル

## 委員長挨拶

本日は、お忙しいなか、また残暑厳しい折にかかわらず、私ども水星交響楽団の演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

当楽団は1984年に一橋大学管弦楽団の若手有志を中心に結成され、年に2回の定期演奏会を主な活動としてきましたが、今回で30回という節目の定演を迎えることができました。これも、情熱ばかりでともすれば無軌道に突っ走ってしまう私たちを支え、叱咤激励いただいた多くの皆様のお陰です。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

特に、設立以来ほとんどの演奏会で練習からずっとお付き合いいただいている常任指揮者の齊藤栄一先生には感謝の言葉もありません。設立当初は弦セクションが1プルトしかいなくて、足りないパートを齊藤先生が自ら歌ってなんとか合奏を行なっており、今では懐かしい思い出の一つですが、本当にただただご厚意に甘えてきた18年間だったと思います。

それにもかかわらず、不思議なことに第1回定演最初の曲だったシューベルト「ロザムンデ序曲」冒頭のC-dur（齊藤先生曰く『実に豊かな音程（笑）』）のユニゾンにはじまり、前回定演のマーラー交響曲第5番に至るまでの約100曲におよぶ演奏のなかで、こんなにお世話になっているはずの齊藤先生が選曲された曲は驚く無かれ1曲もなかったのです！世の中に常任指揮者は数多いらっしゃるはずですが、おそらく全く選曲に関わっていない常任指揮者はほとんどいないのではないのでしょうか。

そこで、節目の演奏会を迎え、その恩返しの意味もあり、団員総意により今回の全ての選曲を初めて齊藤先生にお任せすることになりました。今回のチラシや前回定演のパンフレットにその経緯は書かれています。水響を最も知り尽くした齊藤先生が選んだ曲目は、非常に内容の濃い（濃すぎる？）ご覧の3曲です。ラヴェル、モーツァルトの代表的かつそれゆえに非常に表現の難しい2曲に加え、水響では意外にも初めてとりあげる作曲家であり20世紀を代表する大作曲家、ショスタコーヴィチの大曲「レニングラード」というまさに節目の演奏会にふさわしいラインナップです。今回は（も？）おそらく2時間を越える長丁場になると思われませんが、齊藤先生の我々水響への想いに応えるべく精一杯の演奏で、齊藤=水響の集大成となるよう団員一同考えております。

それではごゆっくりお楽しみください。

水星交響楽団運営委員長 植松隆治

## プログラム

### ラヴェル：道化師の朝の歌

M. Ravel Alborada del gracioso

### モーツァルト：交響曲第41番ハ長調「ジュピター」

W.A. Mozart Symphonie Nr.41 C-dur "Jupiter"

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ 休憩 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

### ショスタコーヴィチ：交響曲第7番「レニングラード」

D. Shostakovich Symphony No.7 in C major "Leningrad"

指揮：齊藤栄一

管弦楽：水星交響楽団

## 指揮者ご紹介



### 齊藤栄一 (さいとう えいち)

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に学ぶ。また、1981年には、京都大学交響楽団とともに2週間にわたりドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮する。1982年には、関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演)の副指揮者を務める。1984年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」を、また、一昨年3月にはラヴェルの舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。作曲もてがけ、これまでに「スーダラ節の主題による交響的変容」(管弦楽曲)「シンフォニエッタ」(金管十重奏曲)「ミサ・プレヴィス」(無伴奏合唱曲)などを発表。また著書として、「振っても書いてもしょせん酔狂」(水響興満新報社)、「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)がある。現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。

## 曲目ご紹介

### ■モーリス・ラヴェル 道化師の朝の歌

この曲を聴くと、ぼくは次のようなストーリーを思い浮かべます。主人公の彼は、芸達者な人間で、仲間内の宴会でいつも話題の中心になるような、いわゆる宴会要員です。曲の前半分は、前夜の宴会の描写です。だんだん人が集まってくるわくわく感、そして、次第に調子が出てきて、大盛り上がりの大爆笑、時々ひそひそ話。彼はその後のことはよく覚えていません。気が付けば、家で一人で寝ています。あーあ、昨夜も馬鹿なことをした、意中のあの娘もいたけれど、いつものように馬鹿やって笑わせただけだ。この想いはどうやって伝えたらいいのだろう…などと一人むなしく考えます。あー、頭痛いな、もう酒はこりごりだ。ときどき心臓がドクドクいってます。そうこうするうちに、夜になり、今夜も宴会です。そこには昨夜以上に盛り上がる彼の姿がありました。今朝の反省はいったいなんだったのでしょうか？…というふうに、この曲は、とても他人事とは思えないのです。

ぼくはいつも思うんですが、水響のラヴェルは、なぜか上手です。かつて一橋大の旧部室、すなわち、木造で今にも倒れそうな、窓は割れて段ボールでふさいであり、床板は節穴だらけ、隙間風で埃が舞うようなところで、で練習していた時代には、おしゃれなフランスものなんか到底できないだろう、とみんな思っていました。しかし、あにはからんや、やってみると結構イケてることがわかり、ドリュッシー、ラヴェル、プーランクなども取り上げるようになり、経験値を上げてきました。99年には『ダフニスとクロエ』全曲もやりました。今回の『道化師の朝の歌』も初練習のときから、成功の甘い香りがぷんぷんしていました。やはり水響の面々にはラテン系の熱い血が流れていると言わざるを得ないでしょう。在京アマチュアオケ屈指といわれる打楽器陣、軽妙洒脱な金管、技巧的でありながら歌心あふれる木管、重厚妖艶な弦。今日の演奏も、水響史に残る名演となること必定です。どうぞお楽しみに。

ところで、ぼくはファゴットを吹いています。あんまり目立つソロがある曲は、実は怖くて嫌いなのですが、ぼくが怖い怖い、というとなぜかその曲に決まってしまう。チャイコフスキーの4番・5番・6番、ベートーベンの4番、『魔法使いの弟子』、ラヴェルでは『左手のためのピアノ協奏曲』や『マ・メール・ロア』のコントラなどなど(『春の祭典』は、別の人だったけど)。そして、今回はこの曲です。ついにこの日がきてしまいました。いつかはきっとこんなことがあるんじゃないかと昔からびくびくしながら、こっそりさらってました。この曲に決まって、やむなく楽器を買い替えました。本番前になるといつも思うのですが、あと1回しか吹けないと思うと、寂しいかぎりです。次はシェヘラザードがちょっと怖い。

(富井一夫)

## ■ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト 交響曲第41番ハ長調「ジュピター」

### ～水星交響楽団とモーツァルト

水響ではモーツァルトの曲が取り上げられることは非常に少ない。特に定期演奏会においては何と、第3回(86年)での歌劇「魔笛」序曲、第4回(87年)での歌劇「劇場支配人」序曲だけである。これはひとえにモーツァルトの曲における楽器編成の問題に拠るところが大きい。つまり管・打楽器の人数が揃けないからである。これは大編成のアマチュアオーケストラなどどこでも抱えている問題であろうと思われる。

定期演奏会以外に目を移すと、まず忘れてはならないのが、没後200年を記念して行われた、くにたちオペラ=歌劇「魔笛」全曲二晩連続公演(91年1月)である。水響が初めてピットに入りオペラを演奏した記念すべき演奏会である。日本語版での上演であったが、それだけに内容がとても良くわかり、大変楽しく忘れ得ぬ体験となった(『魔笛ごっこ?』がしばらく流行った)。その後、特別演奏会(96年)で交響曲第38番「プラハ」を、チェンバーシリーズ第1回(99年)で交響曲第35番「ハフナー」を演奏した(他に、『くにたち第九』(国立市民の合唱団によるベートーヴェンの交響曲第9番の演奏会)の前プロで『魔笛』序曲を演奏したような記憶がある)。

以上が水響におけるモーツァルト演奏の全てである。何か特別な機会でもないとモーツァルトは演奏できないという状況であり、モーツァルト好きの私としては大変寂しい思いをしてきた。

しかし、ついこの機に訪れた。第30回定期演奏会を記念して、常任指揮者の齊藤さんに全ての選曲をお任せするという企画により、モーツァルトの交響曲における最高傑作である第41番「ジュピター」を演奏できることとなった。齊藤さんに大感謝である。

### ～モーツァルトの三大交響曲

モーツァルト32歳の1788年6月から8月の短期間に、最後の3曲の交響曲は書かれている。すなわち第39番変ホ長調K 543、第40番短調K 550、第41番ハ長調K 551の3曲である。モーツァルト自身の「自作品目録」(1784年2月より自ら作成)には、その直前のピアノトリオK 542の完成が6月22日、第39番K 543が6月26日、ピアノトリオK 548が7月14日(K 549は未完の三重唱曲)、第40番K 550が7月25日、第41番K 551が8月10日の完成と記入されている。そうすると第39番が4日間、第40番が11日間、第41番が16日間で作曲されたことになる。驚異的な速さという他ないが、第36番「リンツ」を4日間で仕上げたという実績(確証はないが)もあるので、あり得ないことではないかも知れない。あるいは複数の曲を同時進行で作曲していた可能性も高い。曲がほとんど頭の中で出来上がってしまい、それをただ書き出すだけだったという逸話もある位だから(しかし今日ではモーツァルトといえども複雑な曲ではスケッチをやってからスコアにまとめたと考えられている。スケッチは曲の完成と共に破棄されたようで殆ど現存しない)。

それにしても、これほど完成度が高く、しかも性格の違う3曲が立て続けに生み出されたということは、この時期にモーツァルトの創作力がひとつのピークに達していたことを物語っている。もちろん最大のピークは死の年1791年に訪れる。

旧来この三大交響曲については、演奏されるあてもないまま自己の内的欲求のみに従って作曲されたと考えられてきたが、今日ではこれらが演奏された可能性のある演奏会が、いくつも指摘されている。また第40番に当初の編成に無かったクラリネットを追加した改訂を行っていることも、実演を想定していた証拠と考えられる。

いずれにせよ、モーツァルトが18世紀の交響曲というジャンルにおいて最も高い峰を築いたことは間違いないことである。

ところで、あらゆる分野に優れた作品を生み出したモーツァルトであるが、その本領が最大限に発揮されたのは、やはりオペラにおいてであったと思う(もし、モーツァルトのオペラをまだご覧になっていらっしゃらないようでしたら、是非とも劇場に足を運んで頂き、生でその素晴らしさに触れて頂けたらと思います)。

### ～交響曲第41番ハ長調K 551「ジュピター」

三大交響曲はどれも素晴らしい曲であるが、やはり最後の「ジュピター」が最高傑作と言えよう。「ジュピター」(ユピテル=ローマ神話の最高神)という愛称はザロモン(ハイドンをイギリスに招聘した人物)に由来するもので、モーツァルトのあずかり知らぬものであるが、この偉大な作品にまことにふさわしいものと思われる。

壮麗で堅固な第1楽章、優美な中にも幾分の憂いも湛えた第2楽章、簡潔で明快な第3楽章、ド・レ・ファ・ミの単純な音型から壮大なフーガに発展し、圧倒的なコーダになだれ込む第4楽章、どこを取っても微塵も隙がない。尚、このド・レ・ファ・ミの音型は8歳のときに作曲した最初の交響曲にも使われており、最後の交響曲での再登場には何か象徴的な意味を感じずにはいられない。モーツァルトはこの先3年ほど生き、70曲あまりの曲を作るが、二度と交響曲の筆を執ることはなかった(単に新たに交響曲を作る必要性、または発表機会がなかっただけのことかも知れないが)。

楽曲の細かい説明は省くこととする。曲の素晴らしさを伝えるのに、言葉は余りにも無力なので(本当は私にその能力がないだけ)。

耳を傾けるだけで曲の良さを実感して頂けるような演奏ができればよいのですが。

第1楽章	アレグロ・ヴィヴァーチェ	ハ長調	4/4拍子	ソナタ形式
第2楽章	アンダンテ・カンタービレ	ヘ長調	3/4拍子	ソナタ形式
第3楽章	メヌエット アレグレット	ハ長調	3/4拍子	
第4楽章	モルト・アレグロ	ハ長調	2/2拍子	ソナタ形式

楽器編成 フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

### ■ドミトリ・ショスタコーヴィチ 交響曲第7番ハ長調作品60《レニングラード》

水響はアマオケです。メンバーの多くはいわば「日曜音楽家」で、平日は日本経済の大動脈で東奔西走のビジネスマン…と言えば聞こえはいいですが何のことはない、生きるために働くのか、働くために生きているのか、ともすれば見失いそうになっている単なる普通のサラリーマンです。

ある夜、平日は某有名企業で末端管理職として上司の理不尽なオーダーと部下の理の通った突き上げとの狭間で苦しみ、休日は水響の木管後列で末席を汚しているサラリーマン氏が、疲れ果てて帰宅しそのまま布団に突っ伏すと、なんとショスタコーヴィチがあゝの世から夢枕に立って、何やら話しかけ始めました。

ショスタコーヴィチ 「わが同志よ、何をそんなに疲れておるのだ」

サラリーマン氏 「わっ。ショショショスタコーヴィチ先生ですか？ えーと何だっけ、ス、スパシーバ!？」

タコ 「それを言うなら『オーチン・プリヤートナ』(初めまして)だ。落ち着け同志よ。私の曲をやるなら、NHKのロシア語講座くらいかじっておけ」(注：スパシーバは『ありがとう』)

サラ 「いやいや申し訳ありません。しかしこれが動転せずにいられますか。あまりにくたびれていたの、もしや幻覚かと。いや、ご存命でもまだ96歳、もしかしてまだ生きていらっしゃるわけじゃ」

タコ 「わはははは、生きている訳はないではないか。幻覚でないものを幻覚と見紛うとは、お前、相当疲れておるな。死んでいるからこそこうして時空を超えて来ているのではないか」

サラ 「うーん何だかわけがわからなくなってきました。でもそれにしても、こんな一介のサラリーマンのところに降りていらっしゃるとは、一体全体どうされたのですか」

タコ 「なに、最近天上から世界を眺めているとな、なぜか日本で私の曲が演奏される機会が多い。しかも、プロはともかく、アマチュアがやたらと熱っぽい演奏を繰り広げており、私自身目を見張っているのだ」

サラ 「うーん、確かにそうですね。私もいくつかそういう団体の存在を知っていますし、実際にやったこともあります」

タコ 「そこで私のこの共感を、今度の記念演奏会で満を持して私の曲をやるというお前の団体にも、ぜひ伝えておきたいと思ったのだ。そしてそれにはお前が適任であると」

サラ 「それは先生、光栄に存じますが、どうして日本のアマオケの演奏に、先生は共感を抱かれるというのですか。そしてそれを伝えるのに、どうして私が適任だとおっしゃるのですか」

タコ 「お前はサラリーマン、しかも末端の管理職だな。日本の会社では、使用者は必ずしも資本家ではない、つまりブルジョアではない。一方、労働者もその権利は比較的手厚く保護されており必ずしも搾取の対象ではない、つまりプロレタリアではない。そうすると資本の搾取の対象はどこにあるのか。それは使用者のいちばん下、すなわち末端の管理職ということになる。つまりソ連の『社会主義リアリズム』に奉じた私の音楽を最もよく理解してくれるのは、お前のような末端管理職なのだ。そして、そのような者が多く所属している日本のアマオケの演奏に、私が深く共感するというのも当然ということになる。ただ…」

サラ 「うーん何だか取って付けたような理屈ですね。それに、おっしゃったような現象は『資本と経営の分離』とか『修正資本主義』『社会民主主義』という言葉で説明される、今ではかなり普遍的なものだと思うのですが…。東側では、西側世界の動きってのはそんなふうには伝わらないんですかね」

タコ 「ん？ 私の言っていることは何かおかしいか」

サラ 「い、いやいや。どうもありがとうございます。恐縮至極に存じます。続きをどうぞ」

タコ 「ただ、本音はもう少し深いところにあつてな。…ああ、お前が茶々を入れるから、言おうと思ったことを忘れてしまったではないか。まあよい、思い出したら言うことにしよう。私も歳をとった。お前たちのやるのは、たしか第7交響曲《レニングラード》だったな」

サラ 「はい、そのとおりです。話の腰を折ってすみません」

タコ 「レニングラードは私の生まれ故郷だから、特に思い入れが深い。そのレニングラードがヒトラ率

いるドイツ軍に包囲された。1941年6月のことだ。私は愛国心から、私のできる手段でソ連国民を元気づけようと考えた。その結果がこの交響曲だ。翌年の8月9日、レニングラード初演が行われたのだが、なんとその日は、ヒトラーがいよいよ侵入せんとしていた日だった。楽団員が前線から呼び戻された。聴衆が砲撃を掻いぐって集まった。ホールは満員になった。演奏は大成功、他の連合国にも直ちに報じられて政治的大事件と化した。アメリカ初演の際はワシントンポストが大絶賛の社説を掲載し、国際的的反ファシズムキャンペーンを大いに鼓舞したものだ(注：レニングラードは今のサンクトペテルブルグ。ソ連崩壊に伴い名前が変わった)

- サラ 「曲の説明は私からしておきますね。第1楽章では市民の平穏な生活に恐ろしい戦争が侵入してきたことが語られます。提示部で提示された主題が展開部で展開されるという通常のソナタ形式はとらず、展開部はまったく新しい主題を執拗に反復し、敵軍の侵入をグロテスクに描写しているのが特徴。第2楽章はスケルツォとは言いながら、戦争の影の中でゆがめられデフォルメされた、いわばスケルツォになりきれないスケルツォの様相を呈しています。第3楽章はアダージョ。生活の歓喜や自然への賛美の情を歌ったとされていますが、最初の木管のコラールや弦の熱唱などは、戦争の悲痛さを嘆く祈りのように聞こえますね。アタッカで続く第4楽章は再び戦いと、そして来たるべき勝利の凱歌です。音楽は疾風怒濤のごとく突き進み、戦いがクライマックスを迎えると、待っているのは厳粛な勝利。平和のために戦ったすべての英雄たちに思いを馳せながらゆっくりと高揚し、輝かしいファンファーレで曲を閉じます」
- タコ 「さすが同志。りっぱな解説だ。褒めてつかわずぞ」
- サラ 「でも先生、先生の曲については、このような『模範的な解説』をことごとく否定した、しかも先生ご自身が否定しているという、別の解釈が出回っているのをご存知ですか」
- タコ 「もちろん知っておる。私が死んでから出た、ヴォルコフの『ショスタコーヴィチの証言』という本だな。あれは真贋も含めて世界的大論争になったそうだな。もっとも、ここで私が決着をつけてしまうと面白くないから、黙っておくが」
- サラ 「《レニングラード》については、ヒトラー以前に、スターリンによって非業の死を遂げた人々、スターリンによって傷めつけられたレニングラードに心の痛みを覚えた、従って第7交響曲は、単に包囲下のレニングラードではなく、スターリンが破壊しヒトラーがとどめを加えたレニングラードを主題にしていたと」
- タコ 「否定も肯定もせんよ。私はかねがね『結局は、音楽がすべてを物語る』と言っておる」
- サラ 「はい。ですので我々も可能な限り先入観を排して、楽譜が我々に訴えかけてくるものだけを汲み上げて演奏しようとしています」
- タコ 「そのとおり。言いたい奴には言わせておけばよい。ただ確かなことは、まず《レニングラード》は、自分の故郷が敵に包囲されるという極限状況が創造への強い衝動となり曲として結実したものだ。それは誰が何と言おうと事実だ。そしてもうひとつ、私の曲をスターリンに絡めるというのも、後の世のいろんな場面、つまりソ連の国内情勢の硬化・軟化に応じて、私自身そんな言い方で取り繕ったり急場をしのごことがあっても不思議ではないということだ。…ああ、さつき言いかけたことを思い出したぞ」
- サラ 「ああ良かった。思い出されましたか」
- タコ 「要は私もソ連という超巨大組織の組織人だったと。かなりお前のような『末端管理職』に近い存在だったのかもしれないということだ」
- サラ 「どういうことですか」
- タコ 「自分の胸に手を当てて考えてみる。これまでのお前のサラリーマン人生は、決して真実だけでもなければ、善だけでもなく、本音だけでもなかっただろう。自分は真反対のことを考えていたのに、旗色が悪くなると『いやあ私もそう思ってたんですよはっはっは』などと勝ち馬に乗って、辛うじて生き長らえたこともあっただろう」
- サラ 「サラリーマンの基本ですね。先生もそういう世渡りをしてきたということですか」
- タコ 「また忙しく働きまわらううちに、途中で頭の中が真っ白になって、ふと気がつく仕事すること自体が目的化していたということもなかったか？ 蛇が自分の尻尾を喰うあの絵のような。あるいはセリヌンティウスのことを忘れ『頭をからっぽ』にして『大きな力に引きずられて』シラクスに向かうメロスのような」
- サラ 「ああそれはよくありますね。人がいると仕事が発生する。それは仕事自体が目的化しているってことですよね」
- タコ 「しかしそれでもメロスが美しかった。走っているだけで美しかった。私も《レニングラード》を書いていたときはある種そのような熱病的なところがあつた。そしておそらくいろいろな意味で美しい音楽が書けた」
- サラ 「太宰の耽美的な側面ですね。先生にもそんなところがあつたとは初めて聞きますが」
- タコ 「私の音楽にも、今思うと、そういう組織人的な行動原理の皮肉とか逆説、ひよっとしたら単なる自己満足なのかもしれない、しかしそれだけに純粹で普遍的な創造への衝動といったものが多分に反映されていて、それがお前たちのようなサラリーマンには、よくわかってもらえるのではないか、それで日本のアマオケはあんなに熱っぽく私の音楽を演奏してくれるのではないか、などと考えているのだ」
- サラ 「はあ、何だか素直に喜んでいいのかわからない話になってきましたね」
- タコ 「いや、それは人間の生き方として丸ごと美しく、丸ごと楽しんでいいのではないかな。でない悲

しすぎる。少なくとも、諸君の演奏には私のそういったものがすべて体現されると信じておる。水響なら、それができる」

サラ 「そうですね。我々も、伊達や酔狂で水響やってますから、むしろそういうのは得意分野です。臆することなく、サラリーマンの音楽をショスタコーヴィチにぶつけてみます。いやあ、なんか元気が出てきました」

タコ 「そうだ、その意気だ。どうか頑張ってくれたまえ。期待しているぞ同志よ。では失礼」

6時間後、寝坊したサラリーマン氏は、突っ伏したままのよれよれの背広姿で、慌てて家を飛び出してきました。その姿昨日までと微塵も変わらず。昨夜のショスタコーヴィチとの対話は、頭の中には残っていないようでした…。

(横地 篤志)

## こんなふうになりました ～ 齊藤栄一

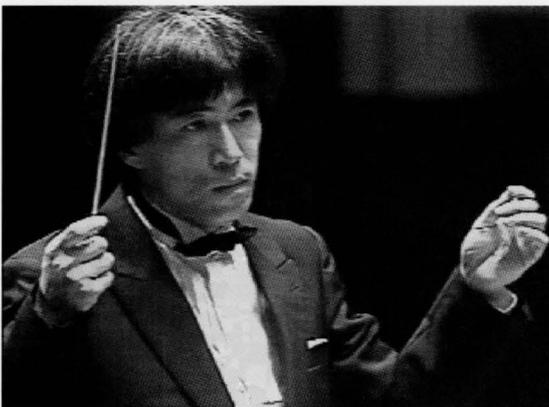
水響が誕生してこの夏で18年になる。設立の当初から常任指揮者として一緒に音楽を作ってきたが、水響の常任指揮者というのは、世に言うそれとは違って、人事権も曲目選定権も一切持たされていない。もっとも、プロのオーケストラならともかくアマチュアの団体で、コンサートマスターを誰にするとか、誰をどの曲に出演させ、あるいは降板させるといったことを指揮者が決めるべきではないし、もしやっかとして、必ず何らかの形でしこりが残るだろうから、私としても人事に口をだすつもりはこれからも一切ない。

ただ、選曲となると話は少し違う。私にだってプログラミングの感覚はある。しかし、各パートの力関係の結果生み出された選曲が、私に言わせれば、あるときは奇異な、またあるときは聴衆にとってヘヴィーな組み合わせだと思われるようなものになったとしても、設立当初から選曲はオケのメンバーだけで行うという伝統がなんとなくできあがっていたために、私としてはそれをそのまま受け入れて、ベストを尽くすしかない。選曲の結果に意見を差しはさんだり、ましてや何か別の曲に差し替えたなら？などと

言おうものなら、水響の顔とも言えるべき委員長氏にハッタと睨まれてしまうのだ。ずいぶん前の話だが、かつて、第2回の演奏会で、ブラームスの交響曲第4番をやることだけが決まっていた、1曲目にベートーヴェンの「レオノーレ」序曲第3番とブラームスの「悲劇的序曲」のどちらをやるか、団員の意見が完全に割れたということがあった。困り切った当時の委員長が、どちらが適切と考えるかと私に聞いてきたので、それならいっそ両方ともやったらどうかと答えたところ、その通りになって、その3曲で演奏会を開いた。常任指揮者でありながら、選曲に関わったのは唯一このときだけであった。

だから、今回の演奏会の曲目をすべて決めてくれと言われたときには、嬉しいというよりも、正直いってとまどった。あれやこれやとスコアをひっくりかえしたり、演奏時間を足し算したりしたあげく、まず、次のような案が出来上がった。

ブラームス：「セレナーデ」第1番／ラヴェル：「高雅で感傷的なワルツ」／シベリウス：交響曲第7番



その後、ブラームスは私個人としては大好きな曲だけれど、曲の構成にいささかスキがあって、練習の過程で、長くて退屈だという声があがることを恐れ、モーツァルト：交響曲第41番「ジュピター」に変えた。ただ、これだと演奏会全体としての時間が短くなるので、アンコールにイベールの「バッカナール」を加えて決定版とした。このほかに、

ベルリオーズ：序曲「ローマの謝肉祭」／モーツァルト：交響曲第39番／ストラヴィンスキー：「ペトルーシュカ」

ロッシーニ：「絹のはしご」序曲／ヤナーチェク：狂詩曲「タラス・ブーリバ」／チャイコフスキー：「くるみ割り人形」第2幕全曲

ベートーヴェン：「シュテファン王」序曲／ヴォーン・ウィリアムス：交響曲第5番／R. シュトラウス：交響的幻想曲「イタリアから」

ベートーヴェン：「レオノーレ」序曲第2番／エルガー：序曲「南国にて」／シューベルト：交響曲第8番「グレート」



などの案を考えたけれど、結局、「ジュピター」「高雅」「シベ7」「バッカナル」で決定版としたのだった。

ところがその後、委員長氏に、今回の選曲は私の完全に個人的な趣味で決めてもよいのか、それとも30回記念定期に相応しい祝祭性が必要なのかと問うたところ、後者だとのことだった。そこで選曲はまたふりだしに戻ったが、オケの基本である古典ものをはずしたくはなかったし、実際水響はこれまでなぜか古典ものとは縁遠かったので、モーツァルトは残し（アマチュア・オケとしてはきわめて珍しいと思うのだけれど、水響はこれまで定期演奏会でモーツァルトの交響曲を一度もやったことがなく、今回が最初である）、いぶし銀のような渋いシベリウスに代えて、一方、これも昔から大好きな曲で、祝祭性が見本みたいな曲である「レニングラード」を入れ、さらに「高雅」は少し長いので、手頃な長さの「道化師」に変えた。

以上が、今回の選曲にいたる経緯である。第1案では、モーツァルトとシベリウスがそれぞれ最後に書いた、しかもどちらもハ長調の交響曲が骨子となっていたが、最終案は、古典の巨匠モーツァルトと、ショスタコーヴィチがその新古典主義的時代にした、ふたつの、しかもどちらもハ長調の交響曲が骨子となっている。また、ラヴェルはどういうわけか水響の体質にあっているらしく、これまでも、「ダフニスとクロエ」全曲、「マ・メール・ロワ」組曲版、「ボレロ」、「亡き王女のためのパヴァーヌ」、「ラ・ヴァルス」、「スペイン狂詩曲」、「左手のためのピアノ協奏曲」をとりあげて、自分で言うのもなんだけれど、どれもそれなりの一定の成果をえているので、今回も縁起物ということで取り上げることにした。

さて、今回初の試みであるところの、団員の総意による選曲ではなく、常任指揮者の一方的おしつけによる選曲が吉と出るか凶と出るか。団員諸君によるだけでなく、今日聞きにきてくださった皆様にもまたじっくりと判定していただきたいところである。

♪♪♪♪♪一橋大学管弦楽団第50回記念定期演奏会♪♪♪♪♪

日時 2002年12月1日(日) 1時半開場 2時開演

場所 文京シビックホール

指揮 田中一嘉

曲目 マラー交響曲第6番「悲劇的」 他

全席自由 入場料 1,000円

お問合せ 070-5087-1950(平山)

これまでのプログラムの編集方針は、なるべく曲目とリンクする内容だけに限定するように心がけてきました。でも、今回は30回記念。節目のお祭りということで、たっぷりと思ひ出話にひたってみることにしました。かなり内輪受け的な内容を含みますので、適当に読み飛ばしながら、一緒に30回を祝ってください。

■歴史編

1984年 赤川寿司の誓い 走り始めた酔狂な夢 西村真吾

揺籃期の水響を語る上で、欠かせないエピソードに「赤川寿司の誓い」というものがあります。当時、社会人になったばかりの一橋大学管弦楽団のOBたちが、初ボーナスを記念する飲み会に結集したのが、国立市の線路沿いにある赤川寿司でした。そこで、今の水響につながるオーケストラの構想が固まったのでした。それを、漫画で表すと、こんな感じになります。



1985年 第1回定期 電話かけまくった初代委員長 本田洋二

水響発足時のモットーは「学生時代にやりたくてできなかった曲をやろう！」である。その第1回演奏会のメイン曲はブラームス交響曲第二番。今の水響も物量的に「学生ができない曲」を手がけているが、当時は巡り合わせで「できなかった曲」であった点はささやかなモットーであったかもしれない。

何をするにも自転車操業の発足当時のこと、一度でも立ち止まれば全てが瓦解してしまいそうで、とにかく練習に人を集める事、水響の存在を確認



しあう事が最優先課題であった。E-mailも無い当時、練習が近づくに必死になって電話をかけまくったものであるが、その努力も空しく、練習にならない程度の参加者しか集まらない日も多かった。水響の存続は、齊藤さんの情熱と忍耐無しにはありえなかったと思う。細々とではあるが、第3回演奏会までを乗り切り、遂に究極の「やりたくてできなかった曲」、第九が第4回演奏会の演目となる。会場も初めて外部の立川市民会館大ホール（当時）を使用。この演奏

会での「唄」との出会いが、水響の活動の幅を大きく広げる契機となり、その後水響は真の発展を遂げて行った。

1990年 現委員長植松氏登板

現在の委員長である植松氏が政権を握るのは、第11回定期演奏会のレセプションのときからです。前委員長の柿田氏からバトンを受けて委員長としての産声を上げ（気持ちわりィ）、翌年5月の第12回定期演奏会（「スターウォーズ」はじめとするオールアメリカプログラム）において最初の実績を残したのでした。以来、12年にわたり、全人生をこのオケの運営に注ぎ、不思議な求心力で引っ張ってきました。えらいえらい。貴重な写真で氏の12年間を振り返ってみましょう。



## 1991年 「魔笛」でオペラ初挑戦

小出裕之

1991年1月、モーツァルトのオペラ「魔笛」を国立芸術小ホールで演奏しました。これは、初めてオーケストラピットに入るという経験と、その音楽の楽しさにいつまでも余韻が消えなかったということで、エポックメイキングなイベントとなりました。歌詞が「恐ろしいおろち」とか「それが掟なのだ」とか、あまりにもナンセンスな内容ゆえ、半年あまりの間そのおかしさが体から抜けず、怪しい飲み屋（新宿「ハッピー」）を見つけると「♪さあ、勇気をもって入っていこう♪」とレチタチャーボしたり、



木管アンサンブルで魔笛の「夜の女王」を編曲して文化村の中庭で演奏したり、挙句の果てに「魔チューバ」という映画を作ろうという話まで出てきたり（実際脚本を書いたり、最初のカットは秩父の吊り橋で4人のチューバ吹きが魔笛のテーマを吹くシーン、と決めて皆で秩父に旅行に行ったりしました）と、それはそれは「魔笛」のおかげで楽しい毎日をおくることができました。写真は本番後に「夜の女王の足先に口付けを」とひざまずく阿呆たちとその秩父旅行のひとコマです。



## 1994年 サントリー初進出 怒鳴り声がまだ耳に 横地篤志

本番1ヶ月くらい前にホール側と当日の段取りについて打合せをするのですが、それまでの定演は多摩地区の公営ホールでつましくやっていたので、打合せはかなり大雑把に流れを押さえる程度で済んでいました。それがいきなりサントリーでということになって、これは大変なことになった、失礼や不行き届きがあつてはいけなさと、舞台配置を詳細に作り込んで打合せに臨みました。緊張して入っていったサントリーの楽屋口。民間ホールらしく愛想よく迎えられ、「やっぱり役所とは違うよなあ」とほっとしたのも束の間、強面のステージマネージャーが入ってきました。「春の祭典」の編成なども熟知し、てきぱきと配置を決めていく取り運びはさすがと思わせるものでした。しかし当日のリハーサルで、打合せと違う場所に私たちが座ってしまい、ステージマネージャー氏に大きな声で怒られたときには震え上がってしまいました。あの怒鳴り声はいまだに耳についていますが、それ以降メジャーホール路線の定着につれ、打合せの勘所とか、業界人との話の仕方とか、場数を踏んで鍛えられた私の会場係スキルは、いまや至芸とまでいえるのではないのでしょうか。



## 1995年 カルミナ上演 燃える合唱男と私の手術 植松隆治

水響の歴史を語るうえで避けては通れないできごとの一つに、オルフ祝祭合唱団との出会いがあります。水響とは今まで、オルフ「カルミナブラーナ」をはじめ、ラヴェル「ダフニスとクロエ」全曲、プーランク「グローリア」など（あ、忘れちゃいけない「だったん人の踊り」！）、多数の合唱曲で共演させていただきました。代表の柴大元氏を中心に、今では年間2回以上の「完全舞舞台上演形式」の公演をこなす「動く」合唱団として、日本の合唱界、いやあらゆるパフォーマンス集団を日夜震撼させる存在となっている彼らですが、そのルーツは意外にも私と柴氏の極めて酔っ払い的な会話にあったのです。

既に「惑星」「マーラー3番」など女性合唱を必要とする曲で柴氏に合唱団のとりまとめをお願いし「水星交響楽団合唱団」なる合唱団を組織いただいていたのですが、いかんせんたまたま女性合唱ばかりで柴氏ご自身の出番はありませんでした。そんなある演奏会での打ち上げで、だいぶ酩酊されていた柴氏は「いやあ、植松さん、私もぜひ歌いたいっすよー！オケと混声合唱で、両方とも面白いやつなんかいないっすかねえ？」とたぶん（注：筆者もだいぶ酩酊していたのでよくは覚えていない）私に話しかけてきたのですが、そこで私は酔っ払いながらも「それなら、まずはカルミナ、それからダフクロでしょうねえ」と答えました。柴氏はそのときはこの2曲ともよくご存知なかった（と思う）ようで「わかりました！じゃ、研究しておきますので！」と返されました（そのはずです）。

なにぶんにも飲み席でしたので、私はそんなことなど全く忘れていたのですが、そんなある日、柴氏から電話があり「カルミナ聴きました！いやあ、素晴らしっすね！」とかなり興奮した様子でした。さらに「これ、すぐやりましよう！いや、合唱はなんとかしますから」と続いたあと、彼は意外なことを言いました。「調べたんですが、カルミナは本来、舞踊と合唱とオケの総合舞台だったんですね。なんとかこの形で実現したいですね。例えばバレエ付きでやるのはどうですか？」私も当時はそんな事実を知らずに、はあと

相槌をうつしかなかった状態で、そんなことは可能かななどとぼんやり思っていただけでした。

そんななかで私は臀部におできができて切除する必要が生じ、密かに入院することになりました。いささか恥ずかしい入院だった（そうですよね？）ので、オケメンにはあまり事実を知らせずにゴールデンウィークをつぶして両国国技館の見える病院にはいったのですが、柴氏はわざわざほぼ毎日見舞いにきて（余談ですが、そのときいつも一緒だったのが今のご夫人でした）、カルミナプロジェクトの進捗を話していかれたのです。「バレエ団は何とかなりました」とか「会場は東京文化でどうでしょう」とか、いやはやほんとに毎日どんどん具体化していく状況に、思わず私は浴びせ倒されて「わかりました。検討しましょう」と答えてしまったのです。

その後カルミナ公演は本当に実現し、東京文化を文字通り満員にした水響にとっても忘れられない舞台になったわけなのですが、その後のオルフ祝祭合唱団との共演はまさに、この両国での柴氏の決まり手「浴びせ倒し」がなければありえなかったのです。お後がよろしいようで（柴さん、これからもよろしくお願ひしますね！）。



### 1998年 オペラシティ超満員 またやったら坊主です 小松泰三

私は、オペラシティには苦い思い出がある。苦さの度合いでいったら、チャンプルにする前のゴーヤでも、比にならないほどの苦い思い出である

1998年の夏、水響はオペラシティで演奏会を行うことになっていた。当時、駆け出しの広告宣伝係であった私は、まだ完成して間もなかったこの都心のホールを、我々の演奏を聴きにきたお客さんで満席にしてやろうという野心に燃えていた。当時の水響は、演奏会を「全席自由」で行うことがほとんどであり、いつもホールの客席数以上のチケットを印刷して団員みんなががんばって集客活動を行っていたが、たいてい当日の客席の「埋まり」は5割から7割がいいところ。オペラシティの客席数は約1,500もあり、当時の水響にとっては、大規模なホールであった。「これは相当気合を入れねば」ということで、我々はチケットを大量に印刷し、団員一同「人を見たら客と思え」を合言葉に、東は千葉の姉ヶ崎から、西は岐阜に至るまで、広域にわたって宣伝活動を展開した。

演奏会の当日、我々は驚愕の光景を目の当たりにすることになる。開場時間の前から、お客さんがホールに殺到し、開場を待つ人の列がホール前目の甲州街道まで続いていたのだ。「ソリストとして来て頂いたピアニスト（若林顕さん）が有名だから？」「オペラシティがまだ出来たてのホールで、注目されているから？」理由はよくわからなかったが、我々のうれしい悲鳴は、すぐに苦悶の悲鳴へと変わることになる。開演前に、ホールは満席になってしまい、ホール側からは「消防法の関係上、座席数以上のお客様にご入場頂くわけにはいきません」という無情な一言（当たり前のことであるが）。ホールに入りきれず、お引取り頂くことになったお客さんからは、私がこの世に生まれてきたことを真剣に後悔するほどの罵詈雑言が浴びせられた（マジでお客さんに胸ぐらをつかまれそうになりました）。でもお客さんが怒るのは、当たり前のことである。もし、この時の演奏会でご入場頂けずにお引取り頂いたお客様が本日いらしているのであれば、この場を借りて改めて深くお詫び申し上げます。本当に申し訳ありませんでした。



演奏会終了後、「信じられん！オペラシティが満席になった！」と、いって水響の委員長は私に抱きついてきた。その委員長のTシャツから薫る汗の匂いは、このオペラシティの苦い思い出と渾然一体となって、私の脳裏に深く焼き付けられるのであった。

今回は、同様の過ちを繰り返さぬよう、細心の注意を払ってチケットの配布数を調整してきたつもりだが、もし万が一あの時の悲劇が繰り返されたならば私は、その時はいさぎよく頭を坊主にしてお詫びするつもりである。この年になると、一度切った髪の毛はなかなか生えないもので（ヒゲは結構いいペースで伸びるのだが）、できれば坊主にはならないで済ませたいものである。

## 2000年 野外演奏会 ファンにもうれしい成長ぶり 小林克江さん

第30回定期演奏会おめでとうございます。

水星交響楽団と私の出会いは、遡る事1987年12月、国立で行われた「ベートーベン交響曲第9番」の演奏会でした。その後、多摩地区を中心に演奏活動を行っていた頃から、マーラーの交響曲、ホルストの惑星など、幅広くエネルギッシュな大曲で楽しませていただきました。当時、観客数とオーケストラの演奏者数が同じ位のこぢんまりとした演奏会が、今や、サントリーホールや、東京芸術劇場などで、大演奏会を行うようになり、嬉しいばかりです。

2000年8月くにたち郷土文化館で行われた野外音楽会は、くにたち市民の水星ファンにとって最高の演奏会でした。郷土館にとっては、オーケストラの公演は初めての経験でしたし、当日の空模様、雨の場合の対策、ライトの配置など、課題はたくさんありました。郷土館の方々と念入りな打ち合わせにより、具体的な演奏会のイメージも固まり、それらの困難も楽しいものになりました。

当日は晴天。演奏会が進むに連れてライトアップされた郷土館・歴史庭園で、蚊取線香の煙と、虫の声の中、水星交響楽団と観客が一つになり”夢幻の世界”に包まれました。

今後のご活躍を楽しみにいたしております。

(編集部注 小林さんは野外演奏会の時に、会場との打ち合せ等、大変ご尽力をいただきました。娘の美保子さんは、第10回定期の時に中学生にもかかわらず入団。本日も第2バイオリンを弾いています)

## 2001年 長野演奏旅行 長過ぎたバス宴會に悲鳴 岡本淳子

長野に演奏旅行に行ったのは昨年11月初旬。水響としても初の試みであった。「国立出発→長野到着(練習)→宿で宴会、宿泊→翌昼本番→バスにて打ち上げ→21時頃国立解散」というハードなスケジュールであったが、本番は大いに盛り上がり、演奏会は無事成功。帰りのバスの中では宴会が繰り広げられていた。演奏旅行で何より大変だったのはこの帰路である。日曜日夕刻の関越道、混まないはずはないのだが、この日は特に混んでいたのか、途中2時間たった頃からバスが殆ど前に進めない。「ざけんなよ、なんでこんなに混んでだよ、タコ!」とわめき散らしたい気分だったが、何とか自分を抑えた。トイレ休憩のサービスエリアでは、団員が終電を逃すことを懸念し、首脳陣がどこか駅に立ち寄るかどうかを話し合っていたのをよく覚えている。結局解散場所を西国分寺に改めたが、到着したのは23時過ぎ。多くの人が終電ぎりぎりという状況で、その後国立で積み降ろしを終えた時には、すでに日付が変わっていた。時間に自由の利かない人々が地方で演奏する大変さを実感した一件であった。でも、大好きなお酒を思う存分飲めたので楽しくもあった。

他にも色々と細かいトラブルはあったが、そんなことにめげずに第2回演奏旅行は行われるのだろうか?演奏旅行庶務班としては怖くもあり、楽しみでもある。

### ■スタッフ編

30回もの演奏会を支えたのは、奏者だけでなく、さまざまなスタッフの努力があったからです。その中には、かなり不思議な役職の人々までいます。

### 団員旅行 心配横目にイカをペロリ

副委員長 兼 取締られ役社長 富井一夫

折にふれ開催される水響旅行。もう何回行ったかわかりませんが、毎度何かしら事件が起こります。

あるとき、九十九里へ行きました。いつものように遅めに集合し、貸し切りバスで目的地に向かいました。お約束の車内大宴会を経て午後到着した後、海岸を散策。次に今回のメインイベント、体験地引網です。砂浜からみんなで力を合わせて網を引きます。酔っ払いにはきつい労働ですが、水響(=酔狂)メンバーにとって息を合わせるのはお手のもの。思いがけずたくさんの魚がかかっている、一同歓声をあげました。

事件が起こったのはこのときです。あるメンバーが収穫の中から体長10cmあまりのイカを拾い上げると、海水で洗って、ペロリ。食ってしまいました。「おまえ、大丈夫か?」「腹壊すんじゃないか?」と声をかけても、本人はいたって平気な顔。「やっぱり醤油がほしかったな」などとぼけています。あれにはびっくりしたなあ。イカ食ったのは誰だったっけ?

記憶の糸をたぐってみると…。それは私でした。



**盛り上げの秘訣は即興 乾杯係 川俣英男**

新しい団員の中には「いつも乾杯のご発声をするあの人は誰？」という疑問を持つ人も少なからずいるだろう。いつの頃からだろうか、私が乾杯の音頭をとるようになったのは。もう自分でも思い出せない位昔からのような気がする。たぶん一橋オケ2年生の第20回定演（ホルスト「惑星」82年）の時に、二次会を学内合宿所でやることになり、その幹事を任されたのがきっかけではないかと思う。その流れで水響でも初代レセプション係となり、兼松講堂での本番後の合宿所でのレセプションを取り仕切るようになった。以来、合宿の大コンパからオケ仲間の披露宴の二次会に至るまで、水響が絡むあらゆる飲み会での乾杯に携わることになった（時にはエキストラとして出た現役オケでさえも）。



乾杯については一つだけポリシーがある。それは必ず即興で行うこと。そのため失敗も多いのだが、どんなに間が悪くとも「乾杯！」と言ってしまえば解放される訳で、お気楽である。最近では前田α君が頭角を現しているようで、そろそろ後進に譲ってもいいかなと思ったりもしている。

**不良債権ゼロに。今すぐ払いなさい！ 会計係 黒川夏実&桑名久美**

「久美ちゃん覚えてる？私達って確か委員長の『あー桑名君、黒川君、君達に会計をお願いしたい』という一言で会計になったんだよね」「覚えてる！その年に突然委員長と前会計の○春さんから年賀状をもらって、？？って思ったんだよねー。あれから早6年…。会計の仕事で一番大変だったことって何かな？」  
 「やっぱり大量の不良債権回収じゃない？滞納額十数万という悪質な滞納者が何人もいたんだよね」「○bの○出さんが胸ポケットから19万円の新券を広げて『ハイ！』と手渡してくれた時は嬉しかったなあ。努力の甲斐あって今ではその不良債権もほぼ無くなったけど、どうも『会計=怖い』みたいなイメージがついちゃったよね」「私達も好きで督促をしている訳ではないけど、とにかくみんな払いが悪い！演奏会当日って人もかなり多い。そう、今これを読んでドキッとしたあなた、今すぐ払いなさい！」「もう、次回からは演奏会前をお願いしますね」

本日支払い不可能な方は下記宛てにお振込みください。

UFJ銀行	赤坂支店	貯蓄預金
口座番号	1047922	
名義	水星交響楽団	

**水響興満新報 昔、ちょっと新報社でお茶汲み斐やっていた女子一渡辺さつき**

1988年に発刊された水響の機関紙が興満新報です。オケ内の時事問題をしゃれた切り口で扱ったトップ記事に、さかえやのマスターも登場する楽しい4コマ漫画。団員のリレー式コラム。地方や海外の団員の便り。堅苦しくなく、しかし読み応えのある内容。練習の後、さかえやで皆が話そっちのけで読みふけていた光景を思い出します。普通に接していたのではわからなかったあの人のこんな一面。知りたくなかったこの人のそんな趣味。定期演奏会へ向けての真面目な企画。約6年に渡り水響の結束を側面からサポートしていました。この文章を書くにあたり、資料を下さった終身名誉編集長に御礼申し上げます。ある号でどうしても記事がかけず、私が空白に「次の選曲会議では○○に清き一票を！」とイタズラ書きをして発行したらその曲が通ってしまい、編集長が「ルール違反だ」とおっしやっていたと人づてに聞きました。本当に軽い気持ちでやった事なのです。信じて下さい。

**名ソプラノも惚れ込んだ世界の宴会芸**

**奏楽係 ヒンデミット交響楽団**

奏楽係。これこそ、絶対に他のオーケストラにはない役職だろう。演奏会後のレセプションの終盤で、誰もがへべれけになっているころ、正装でさっそうに現れる。そして、その日の演目のパロディー版を、時事ネタに絡めて吹きまくって、爆笑を巻き起こす。日本で、いや世界でも数少ない、コミック・バンドならぬ、コミック・クラシカル・アンサンブルなのだ。名前の由来は、「世の中の森羅万象すべてを音にする」ことから、ヒンデミットなのだとか。コアメンバーは、司会兼クラリネットの西村真吾氏、ホルンの東森智史氏。水響の最長老でもある2人が、学生時代からやって来たのだから、歴史は水響よりもはるかに古い。その後、何度かのメンバーチェンジを経て、最近ではクラリネットの横地篤志氏、タイコの高橋淳氏、そして、うら若きトランペットの田玉詩織嬢を加えた5人で活動していた。





この手の宴会芸は、ともすれば内輪受けになりがちだが、彼らのスゴイところは、団員以外の人々の心までも、がっちり捕らえてしまった点だ。かつての恒例行事だった「くにたち市民第九合唱団演奏会」のレセプションで、彼らが演奏したところ、メチャメチャ受けてしまい、一部の国立市民にとって「紅白」と同格の年末の恒例行事となった。そしてある時期からは、ソリストとして

招かれていた日本を代表するソプラノ歌手の大倉由紀枝さんの大のお気に入りになり、おひねりまで下さるようになった。

西村氏の名調子に、東森氏の太いマユ、横地氏のデカイ耳、高橋氏のヘンな打楽器、そして、なぜか巻き込まれてしまった詩織ちゃん。そのアンサンブルは、完成したかに見えたが、2000年12月の「復活」演奏会を最後に、彼らは楽器を置いてしまった。果して、彼らは20世紀の記憶とともに、消え去ってしまうのか。いや見たい。どうしても聴きたい。ぜひ、皆さんも本日のアンケート用紙にリクエストしてほしい。  
(祐成秀樹)



「僕は死にません！」

■その他写真編～演奏会ステージ



(バンジョー青年！)



■その他写真編～各種催し

合宿



水響の初合宿（楽器を持参するか聞く人もいたらしい）



つい先日行われた最新の合宿恒例の「業界対抗ゲーム大会」では白熱した勝負の結果、「その他肉体労働チーム」が初優勝。メーカーチームは最下位に転落、金融チームは3位ながらメーカーチームに勝って大喜び。

飲み処



旧さかえや



マスター若い！

大衆酒蔵

さかえや



「やかた」で油そば



豊島園パークマンション



南麻布くつわだビル



結婚式二次会（一例）

旅行



委員長再び（アウトドアスポーツ編）



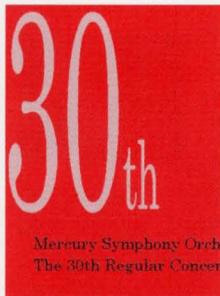
事件前夜



■編集後記

今回の特別プログラム作成にあたり、執筆・資料提供いただきました皆さん、ありがとうございました。編集者の独断と資料提供をお願いした人の偏りにより、水響の18年間を中立的に表現出来たか不安が残りますが、編集しながらこの団体に縦横に流れる葉脈の熱いつながりをはっきりと感ずることができ、幸せな気分になりました。次は50回記念ですかね。

編集人 祐成・りよん・小出



# 水星交響楽団

常任指揮者：齊藤 栄一  
 コンサートマスター：吉田 健一郎  
 副指揮者：榎原 尚徳  
 金管トレーナー：山田 裕治 弦楽器トレーナー：小田 透  
 ホルントレーナー：古野 淳

## ■ 1st Violin

阿部 佳子  
 内田 裕子  
 黒川 夏実  
 小林 美香子  
 鈴木 尚志  
 鈴木 牧  
 土屋 和隆  
 黒葛原 麻衣子  
 西端 雄一  
 野村 国康  
 福地 由樹子  
 福原 優子  
 横田 裕祐  
 吉田 健一郎

## ■ 2nd Violin

石川 智子  
 大平 あかね  
 川俣 三枝子  
 小出 明美  
 小林 美保子  
 島木 敏郎  
 祐成 秀樹  
 鈴木 真由子  
 徳地 伸保  
 浜田 浩子  
 古川 憲  
 前田 啓  
 米嶋 龍昌

## ■ Viola

有井 晶  
 井上 拓  
 川俣 英男  
 木村 納  
 金 純子  
 小松 聡  
 田北 佐和子  
 永井 好  
 傳 冠昇

福島 恵一  
 松岡 正人  
 宮崎 雅子

## ■ Violoncello

今村 文子  
 大原 潤  
 鈴木 皇太郎  
 高原 学  
 橘 温子  
 東郷 丞  
 中山 佐知子  
 日吉 実緒  
 前田 秀紀  
 松重 英子  
 三輪 恭子  
 森本 正道  
 能岡 雅人

## ■ Contrabass

大槻 智子  
 大西 功  
 金子 千春  
 刈田 淳司  
 辻野 浄士  
 中留 史恵  
 長屋 裕大  
 深澤 雄己  
 本多 美佐子  
 松本 敦  
 宮嶋 順也

## ■ Flute

岡本 淳子  
 川崎 裕恵  
 西村 かよ子  
 本田 洋二  
 横尾 良子

## ■ Oboe & English Horn

井本 もい  
 小出 裕之  
 進藤 彩  
 野口 秀樹

## ■ Clarinet

大山 泰広  
 河西 亮子  
 西村 伸吾  
 横地 篤志

## ■ Bassoon & Contra Bassoon

佐藤 寛治  
 高橋 健  
 富井 一夫

## ■ Horn

伊集院 正宗  
 岩崎 美由紀  
 榎原 尚徳  
 岡本 真哉  
 加藤 憲一  
 北 典子  
 桑名 久美  
 小松 泰三  
 東森 智史  
 平山 智  
 山形 尚世

## ■ Trumpet

浅田 健二  
 家田 恭介  
 岩瀬 世彦  
 桜井 新  
 金子 恭江  
 後藤 涉  
 田玉 詩織  
 林 美紀子  
 宮崎 幸恵

## ■ Trombone

新井 恵美  
 小林 威之  
 小山 千尋  
 櫻井 統  
 佐藤 幸宏  
 瀬古 義久  
 高橋 康昭

## ■ Tuba

植松 隆治

## ■ Percussion

石井 浩史  
 磯村 一弘  
 梶浦 未紀  
 小山 健二  
 小山 葉子  
 千秋 修子  
 高橋 淳  
 山本 勲  
 吉村 恵一  
 渡辺 麻子

## ■ Harp

東森 真紀子  
 矢澤 みさ子

## ■ Piano

石川 美幸